

## 高原地域における肉用牛生産の現状と課題（1）：肉用牛生産の経営形態

武藤, 軍一郎  
九州大学農学部

古沢, 弘敏  
九州大学農学部

福留, 功  
九州大学農学部

<https://doi.org/10.15017/12642>

---

出版情報：九州大学農学部農場研究資料. 8, pp.107-110, 1985-10. University Farm, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 高原地域における肉用牛生産の現状と課題

## (第1報) 肉用牛生産の経営形態

武藤軍一郎・古沢 弘敏・福留 功

### 1. 目的

日米農産物の自由化問題、とりわけ牛肉の自由化が実現すれば、わが国の肉用牛生産は壊滅的な打撃を受けると言われている。自由化をすべきでないのは当然であるが、国民により安い牛肉を供給するためには、牛肉生産費を切り下げねばならない。そこで、わが国で主要な肉用牛子取り地帯である大分県久住町を対象に肉用牛農家の現状と課題について、経営・技術の面から検討を行うことにした。

### 2. 材料と方法

久住町畜産センターの集落別肉用牛飼養調査によって、平均飼養率より高く、積極的に牧野組合の運営を行ない、肉用牛飼養に取り組んでいるA集落を、大字郡野から選んだ。

1985年7月に農家実態調査および肉用牛子取り生産費調査を行なった。なお、調査期間は、1984年4月1日から1985年3月31日となっている。

### 3. 結果および考察

- 1) A集落は農家が21戸で、うち牛飼養者が17戸である。経産牛飼養頭数は6頭以下が14戸だが、7頭以上が3戸で、多頭化が進みつつある。しかし、経産牛を10頭飼養する農家も複合経営を行なっている。第1表にみるように、これら17戸の経営形態は、いずれも水稲と結合している。だが、水稲+牛という形態は4戸で、8戸にシイタケが結合しており、水稲+牛+シイタケが最も多い。
- 2) 水田の面積は25～400 aで、150 a以上が18戸を占め、大きな柱になっている。大部分の農家の農業粗収入の過半を水稲が占めている。水田の面積と牛の頭数との間に相関は認められないが、頭数が4頭以下では、水稲粗収入が60%以上を占めている。ただし、7頭以上の農家は、水田が2.5 ha以上と大きく、水稲の粗収入は50%以下である。この農家群は、従来久住町に一般的に存在していた農家経営、農法から抜け出たとみてよい。

第1表 A集落における農家経営の概況

農家 番号	家族 人数	世帯主	就業		状況		水田		畑		貸付地		経営形態	成牛頭数
			その妻	息子	その妻	面積	うち借地	面積	うち借地	田	畑			
1	5	280 ▲ 46	300 ● 46	260 ▲ 22	274 <sup>a</sup>	15 <sup>a</sup>	30 <sup>a</sup>	- <sup>a</sup>	- <sup>a</sup>	- <sup>a</sup>	- <sup>a</sup>	R+B+M	10	
2	6	250 ▲ 65	250 ● 60	250 ▲ 37	400	100	70	50	-	-	-	R+B+M	9	
3	6		50 ○ 68	300 ▲ 42	260	65	84	80	65	40	-	R+B+M	7	
4	3		310 ● 55	300 ▲ 26	230	-	40	-	-	-	-	R+B+M	6	
5	4	30 △ 58	300 ● 55	100 ▲ 32	180	-	-	-	-	-	-	R+B+P	6	
6	3	250 ▲ 46	200 ● 44		178	-	20	-	-	-	-	R+B+M	6	
7	6	250 ▲ 60	30 ○ 54	150 ▲ 35 運送	167	-	48	18	-	-	-	R+B+M+P	6	
8	3	150 ▲ 57	200 ● 52	150 ▲ 26 労務	206	39	15	-	-	-	-	R+B+P	5	
9	6	△ 79	○ 75	280 ▲ 39	220	30	30	-	-	-	-	R+B+M	4	
10	3	△ 69	280 ● 58	280 ▲ 31	171	-	60	-	-	-	-	R+B+T	4	
11	7	200 ▲ 60	200 ● 55	60 △ 36 公務	250	-	-	-	-	-	-	R+B+M+P	4	
12	5		○ 75	350 ▲ 49	168	-	20	-	-	-	-	R+B	4	
13	7	△ 78	○ 67	200 ▲ 44	260	67	15	-	-	-	-	R+B	3	
14	2	300 ▲ 57	300 ● 54		186	30	15	-	-	-	-	R+B	2	
15	4	40 △ 69	100 ○ 69	40 △ 48	150	-	50	-	-	70	-	R+B+P	2	
16	3		○ 77	300 ▲ 56	150	-	20	-	-	-	-	R+B	2	
17	4	20 △ 43	100 ● 43		25	-	3	-	58	-	-	R+B+P	2	
18	3	180 ▲ 39	180 ● 38		174	-	7	-	-	-	-	R+P		
19	6	80 △ 68	20 ○ 65	40 △ 38 公務	159	-	-	-	-	-	-	R+P		
20	3	△ 56		40 △ 31 公務	112	40	1	-	37	26	-	R+M+P		
21	2	△ 62	○ 60		-	-	-	-	120	20	-	小作料		

注 1. ▲ 男子農業専従者、左側の数字は農業従事日数、右側の数字は年令、△ 男子農業非従事者

● 女子農業専従者、その他は同上

2. Rは稲作、Bは肉用牛、Mは兼業、Tはトマト

第1表続き A集落における農家経営の概況

農家 番号	農地 移動	農 業 租 收 入										合 計	農 業 租収入率 %
		米	麦	雑 穀	苧 草	香 草	産 物	其 他	子 牛 補 給 金	転 作 奨 励 金	牧 野 組 合		
1	S 48.田⊕25a	377	14	208	144	9.5	45.4	34.7	20	40	—	892.5	93.0
2		427	67.6	150	247	150	35.7	28.5	25	—	—	1,128.8	97.0
3	S 30.田 S 46.田 S 46.田 ⊕65a, ⊕15a ⊖6a	546	67	145	151	11.5	14.5	22.4	10.9	—	小作料 52.5	1,020.8	93.0
4	S 57.田 S 58.田 ⊕23a, ⊖10a	324.5	40.3	75	134.4	—	41.3	8.0	?	—	—	623.5	100.0
5	S 50.田⊖40a	228	13	—	128	—	21.8	16.4	—	32.7	—	734.2	55.0
6	S 54.田20a→山林	266	17	40	109.3	15.0	32.0	22.7	—	14	—	516.0	97.0
7	S 36.田⊕50a	252	17.5	68	100	—	41.8	7.6	20	23.4	—	740.1	65.0
8	S 58.田⊕33a	285	24.4	2	61.3	—	34.1	18	29.4	85	—	539.2	78.0
9	S 54. 借地	326.8	21.4	100	79.4	—	23.4	20.4	21	—	—	592.4	96.0
10	S 32.田⊕58a	229.5	14.0	—	55	ト 170	15.2	18.8	4	60	—	565.7	88.0
11	S 42.田 S 45.田 ⊕80a ⊖30a	324	62.4	45	105	—	17.9	19.6	—	34.0	7.0	920.5	62.0
12		252.1	26	7	35	1.7	23.0	13.3	—	4.5	—	367.6	90.0
13		308	—	—	80.5	—	17	13.3	—	—	—	419.0	100.0
14	S 58.田⊕25a	220	23.4	—	24.2	—	2.5	26.1	—	—	4.0	300.2	98.0
15	S 42.畑⊕120a	250	40	15	48.3	17	17.4	18.9	3	40.0	10.5	820.1	49.0
16	S 51.田⊕21a	190	41	10	56.7	1	11.4	8.0	—	—	—	318.1	100.0
17	S 49.田⊖54a	10	—	—	28.7	—	—	0.3	—	22.1	26	286.0	13.0
18	S 49.田⊕54a	230	—	—	—	16	—	20.2	—	40.5	—	306.7	86.0
19		109	—	—	—	—	—	25.9	—	60.0	—	734.9	18.0
20	S 58.田40a 借地	142.5	49.4	25	—	—	—	30.9	—	3.99	3.0	589.8	42.0
21	S 57.田⊖75a	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

- 3) 一方、兼業化の進展が著しい。No.5、7、8、11、15、17がそうである。No.12、13、14は専業農家の形態を示すが、実際は息子が他出した40代、50代の夫婦世帯である。経済的には最近の子牛価格の低落、それと結びついているが、社会的には嫁飢饉が兼業化を促進し、息子夫婦は農業をやらない方向に進んでいる。これは、逆にみると40代以上による牛飼いであって、頭数の増頭は望めず、数年後には無畜農家の増加を予想させる。いずれにせよ、経営形態をめぐって、各経営の条件に合わせて、所得確得をめざし多様な方向が出はじめている。肉用牛生産の場が、このように多様化していることは重視されるべきであろう。
- 4) 多くの農家が田を増加してきている。この購入は多くの場合、離村者または老人のみの農家からの買入れとなっている。これまでの農民層の分化は、切り下げられた労賃の蓄積によって、水田面積の拡大を続けて来た。
- 5) 子牛販売粗収入は287～247万円となっている。100万円以下が10戸、101～200万円が6戸でそれ程大きなものではない。子牛価格の低調の中で、アサマムギの作付面積の増加が注目される。
- 6) 農業粗収入が農家粗収入の80%以上を占める農家が12戸、60%以上で取ると15戸もあって、農業の重要性が指摘できる。畜産からの粗収入は、それ程大きくないとは言え、堆肥の生産、地域の草資源の活用、労働の場の創出という点からみると積極的評価が与えられる。